

~~~~~  
論 説  
~~~~~

異国フェスの言語政策論的分析

台湾フェスタのステージトークを事例として^{1),2)}

猿 橋 順 子*

1. はじめに

週末になると、都心の大型の公園や広場では外国名を冠したフェスティバルが開催される。類似の公開型の野外イベントには、フェス文化の起点とも言える音楽フェスや、特定の料理を一堂に集め、味を競い合うフードフェスなども行われる。諸外国名や地域・都市名を冠した異国フェス³⁾は、これらのイベントに通じる特徴もあるが、異国をその空間に持ち込もうとする点で明確に区別し得る。そこに持ち込まれる文化は、それぞれの国・地域の言語で育まれたものである。そのため、異国フェスには翻訳や通訳、バイリンガリズム、マルチリンガリズムなど複数言語の使用と、言語圏の越境にまつわる諸相が深く関与していることが予測される。

外来の祭りを持ち込む地域単位の営みは移民の歴史と共にあった。それらの祭りには、祭りを担う大人たち自身の楽しみや結束感を高めるといった目的もあるが、コミュニティを担う次世代に民族文化を継承し、健全な民族的アイデン

* 青山学院大学国際政治経済学部教授

- 1) 本研究は JSPS 科研基盤 (C) の助成を受けた研究プロジェクト「多言語公共空間の形成とコミュニケーション秩序」(16K02698) の一部である。
- 2) 本論は 2016 年 12 月 17 日に開催された言語管理研究会 (於: 青山学院大学) の「言語政策と言語管理分科会」での口頭発表「異国フェスの言語管理——SNS からフェス場まで」に基づき加筆修正したものである。
- 3) 猿橋 (2016b) の定義「様々な国名や地域名、外来の文化名を冠した、野外で行われる公開型の祭り・フェスティバルを「異国フェス」と総称する」(p. 61) に拠る。

ティティを育むという意義がある (McDermott 2012)。そのため、ホスト社会に同化主義の傾向があると、移民コミュニティの祭りは地域社会の理解や協力が得られにくく、存続が難しくなる (飯田 2002, 谷 2015)。現在に続く移民コミュニティの祭りは、少なからず地域社会との摩擦を乗り越えてきた歴史を持っている。

異国フェスが従来の移民の祭りとは大きく異なる点は、それが日比谷公園や代々木公園、山下公園など、地域社会を超えた大型の公園で開催されることにある (猿橋 2016b)。このような祭りを可能にしているのはインターネット技術に拠るところが大きい。インターネットは当該国の出身者を中心としつつ、あらゆる国籍と文化背景を持つ人々が、掲げられた国名を求心力に各地から集まることを可能にした。もともと人が多く集まる都心の公園で開催される異国フェスは開始から終了まで多くの人で賑わう。開始直後から Facebook 等で情報を拡散することが呼びかけられる。投稿に呼応した人々が後から合流していく様子も散見される。

だからと言って、異国フェスが移民コミュニティ内で行われる祭りに比べ、開催が容易になったとか、内容が濃密になったと言うことはできまい。継続が難しくなった異国フェスも少なくない。打ち切られた経緯を関係者から聞くにつけ、異国フェスは様々な有形・無形の基盤の絶妙なバランスの上に成り立っていることに気付かされる。また、異国フェスの目的、来場者の参加動機は共に多元化している。

実地調査を重ねるにつれ、異国フェスは言語・文化背景のみならず、帰属意識、興味関心、知識技術レベル、経験値において様々な人々が、様々な動機と期待をもって行き交い、出会う場であることが分かって来た。また、公共空間でありながら、相互協力的にイベントを実現し、盛り上げようとする様子も確認される。さらに、異なる言語話者、文化背景をもつ者が予告なく集う場であるから、言語面の対応、管理が必要とされ実践される場でもある。

Blommaert (2007) は移民をはじめとする国境を超えた人の往来が盛んな、いわゆるグローバル化する社会は、多極的かつ階層化された秩序が混在すると

指摘する。そこでは言語・コミュニケーション上の規範は予め共有されているわけではないため、人々は規範の観察、交渉や創造のプロセスに参加することを余儀なくされる。すなわち、基底規範⁴⁾に見直しが求められるという点で、社会言語学が長年探求して来た接触場面(村岡 2016)の研究にも通じる。さらに、異国フェスの場合は、個々のコミュニケーション実践と、フェス全体の言語対応・言語管理が同時に観察し得る場でもあると予見される。日本に暮らす当該国の出身者にとって、異国フェスがどのような意味を持つ場になっているのかは丁寧に探求していく必要があるだろう。

2. 異国フェスの言語政策論的分析の意義と視点

2.1 異国フェスの言語政策論的分析の意義

異国フェスの言語政策論的分析には三つの意義が考えられる。第一に、社会的にマイナーな立場におかれる移民の言語にとっての意義である。McDermott (2012) は都市空間を少数派コミュニティの文化活動に等しく開放することの意義について、北アイルランドにおける移民の祭りや芸術祭を事例に考察している。McDermott (2012) は、都市の公共空間を活用した移民のイベントは、都市型移民の増加に鑑みて必然の現象と見る。同時に、一般的に移民は自らの言語を家庭など限られた私的な領域でしか用いない。そのため、祭りという形をとって公共場で彼らの民族言語を使うこと、公的に使われている様子を間近に見ることは、移民言語の地位向上や継承言語に対する肯定的なイメージを育む上で貴重な機会となる (McDermott 2012)。

アメリカにおけるインド移民の祭りの調査を通して Mitra (2016) は、祭りが移民にとって代表的な文化実践の場になっていると指摘する。他者から「見られる」(p. 118) ことを通してイベントの提示様式にも変化が生じる。たとえば、特に女性にとって、民族の衣装と装飾品を身にまとうことに新たな意味が付与される。そういった変化は移民社会の社会的性(ジェンダー)の役割認識に影響

4) 「どのような言語行為が適切であり、どこまで許容されるか」がそれぞれの場面においてデフォルトとなる「コミュニケーション要素の束」(村岡 2016: 6)。

を与えたり、祭りと商業のつながりを加速させるなど様々な波及作用を生み出すという。

日本では、従来の集住地域での移民の祭りが、地域社会に必ずしも常に理解され、歓迎されながら発展してきたというわけではない経緯（飯田 2002, 谷 2015）がある一方で、移民の子ども達がそれぞれの言語的・文化的ルーツを肯定的に受け止めることの重要性が確認されて久しい。他方で、ホスト社会側の参加も広く促す異国フェスでは、従来の移民の祭りが経験して来なかった需要に応える必要性にも直面していよう。これらの背景から、異国フェスにおいて移民の言語がいかに扱われているかを探求する意義があると言えよう。

第二に、二つ以上の言語文化が接する異国フェスの場において、どのような言語面の接触や混濻が行われるかを探求する意義がある。異国フェスに盛り込まれる国や地域の文化は日本語以外の言語的土壌で育まれてきたものである（Schiffman 1996）。異国の文化を一時的に流入させる活動の中で、各言語がいかに用いられるのか、日本語と併用されるのか、あるいは日本語に置き換えられるのかは言語政策論的関心にもつながる。あるいは、その過程において国際言語としての英語の役割や機能はいかに見出し得るかも関心が寄せられるところである。

さらに、第一の意義との関連から見ると、異国フェスで展開される文化実践や演出が、移民の言語のままで行われるのか、あるいはホスト社会の文脈や日本語に置き換えられて紹介されるのかは、祭りが誰のためのものなのかということと言語面から探る指標となる。実際の異国フェス場では、どちらかに完全に偏っているということとはなかろう。どのような場面で民族言語そのままに文化実践がなされ、どのような場面で日本語への置き換えが積極的・計画的／即興的になされるのか、あるいは複数の言語が併用されるのか。それぞれを引き出す事情や付随する課題を探ることで、異国フェスを民族言語実践の場としていかに発展させ得るかを論じることができよう。

第三に、個人・対人レベルの言語選択や言語管理が、イベント全体の言語対応や言語政策とどう結びつくのかを探求する可能性がある。言語政策研究は、

個人や一場面といったマイクロレベルの言語使用や言語管理が、いかに組織やコミュニティといったマクロレベルの言語調整・管理・政策につながり得るのか、その関連の解明に関心を寄せてきた (Ricento 2006, Hornberger 2013, 木村 2015)。一般的に言語政策と言うと国家やそれに準ずる機関が取り組む、言語の地位、本体、獲得に関する政策がイメージされる。しかし、言語政策研究において、国家は言語政策を担う数ある主体のひとつと捉えられる (Spolsky 2009)。特にグローバル化は、国家レベルの言語政策だけでは不十分なほどに、言語の課題や機会を多様化させている (Silverstein 2015)。企業や非政府組織、国際機関をはじめ、あらゆる単位と規模の組織・集団は、国家が展開する言語政策を資源として活用したり、脅威として備えたり、交渉したりと、それぞれの文脈において解釈と適用を繰り返しながら独自の言語政策を展開している (Johnson 2009)。それはいつも明文化されているとは限らず、むしろ慣習化されていることの方が多い (Schiffman 1996)。翻って見れば、国家の言語政策も社会の言語使用や言語イデオロギーの趨勢を考慮した上で策定される。すなわち、国家を含め、あらゆる主体の言語政策が相互作用しながら実施され、言語使用や言語変容に影響を及ぼしていると考えられよう。

異国フェスの開催にあたっては、企業組織とも異なる、有志による実行委員会が組織される。フェス場はもとより、準備段階から多言語使用が常態であろう。異国フェスでは複数の言語話者が介在・協働することで生じる言語問題が予見され、それを解決するための手段が模索され、調整・修正される場であることが見込まれる。

2.2 異国フェスの言語政策論的分析の視点

本節では、言語政策研究における主体観をめぐる議論を整理し、異国フェスを扱う上でいかなる視点に立つことが望ましいかを論じる。

Hornberger (1996, 2015) は国家によるトップダウンの言語政策に対し、少数言語維持のための民間組織や学校の取り組み等をボトムアップ型の言語政策と位置付けた。そして、より劣勢な立場におかれる側の言語政策行動に注目する

枠組みを提示した。具体的な言語問題に対し、その問題解決を目的に取り組まれるボトムアップ型の言語政策が、より望ましい言語政策のあり様であると考えた研究者らは、個人レベルの言語問題への対処を起点とした言語管理理論 (language management theory, LMT) を提唱した (高 2016)。

言語管理理論は基底規範を共有しない人々が出会う場、すなわち接触場面に注目する (村岡 2016)。まず個人レベルの言語問題が実際のコミュニケーション場面で気付かれ、対応行動を生み出す。そのプロセスは単純管理 (simple management) と呼ばれる。その経験から組織レベルの言語管理 (組織管理, organized management) が立案され、実施される。組織レベル (マクロ) の言語管理が個人レベル (ミクロ) の言語管理にも影響を与え、二つの次元は循環系を作り出す (Nekvapil 2012)。木村 (2015) はミクロとマクロの言語管理をつなぐ研究者の役割に注目している。

これらは、既存の不均衡な力関係の是正に研究の意義を置くアプローチである。一方で、研究の起点において国家をトップ、組織をマクロと位置付け、国家以外の集団をボトム、個人をミクロとすることをめぐる議論もある。研究者が特定の主体を高次としてしまい、その他の組織や個人を低次に据え置くことにつながっているのではないか、という懸念である。例えば、Spolsky (2009) は国家が展開する言語政策が、およそいつでもコミュニティの言語使用の実際からずれている点に注目する。このことから、例えば言語間の優劣関係の説明や是正措置の可能性を考える上で、様々な社会領域の言語政策行為の相互作用を見る視点の重要性を指摘する。マクローミクロ、高次—低次の概念を相対的かつ流動的な関係性に読み換える試みもある (Johnson 2015, Wortham & Reyes 2015)。同様の観点から、Hult (2015) はネクサス分析 (Nexus Analysis; Scollon & Scollon 2004) を言語政策研究に援用する可能性を論じている。

Scollon & Scollon (2004) は社会行動をディスコース循環と見ることで、現象の解釈と変容の説明に迫ろうとした。そのための分析枠組みとしてネクサス分析を提唱した。従来、個々のコミュニケーション場面はミクロレベル、社会・政治・経済レベルの力関係や権威、組織間関係はマクロレベルと区別されてき

た。ネクサス分析は両者を統合することを目的としている。循環するディスコースは個々の行動や発話、創造物などに様式を変えて存在しており、その軌跡を辿っていくことで変容の契機を見出すことができると考えた。循環するディスコースは研究者自身も持っており、それを活用することで研究者がディスコース循環の変容に関与することも可能であると言う。

異国フェスの場合は、企業などの組織よりも緩やかで、日常の公園よりは結束度の高い公共空間と考えられる。公園事務所や実行委員会は、場を管理する主要なアクターであるものの、各ブースではそれぞれの店主が、ステージでは時間ごとに演者や司会者が場を仕切る。来場者がいなければイベントそのものが成立しないため「みなさんこそが主役です」といった来場者への呼びかけも聞かれる。

異国フェス場の言語政策研究は、移民の言語がいかにそこで価値ある言語として認められているか、あるいは移民の言語に活力を生むためにはどのような環境や条件が必要かといったことを探求することが可能な場と考えられる。しかし、研究の起点において日本語をホストコミュニティの言語、移民の言語をゲストコミュニティの言語と両者の関係性を固定化して見ることは適当ではないかもしれない。主客関係や力関係が動的であることも異国フェスの特徴と言える。場そのものがミクローマクロの柔軟な転換可能性を備えているとも考えられる。その場の主客関係が言語選択や言語対応を決定することもあれば、言語能力や異言語間を媒介する営みが主客関係を決定する場合もあろう。移民の言語研究において所与とされてきた主客関係を一旦括弧に入れ、現場で起きる現象に根差した視点で見ていく意義があると考えられる。そこで、本稿は、異国フェスにおいてエスノグラフィックな手法で収集したデータをもとに、Scollon & Schollon (2004) のネクサス分析を交えて、異国フェスの言語政策の営みに接近することを試みる。

3. 異国フェスのフィールドワーク

上記の問題意識に基づき、筆者は2015年から2016年にかけて以下の12種、

13回の異国フェスでフィールドワークに取り組んだ。それぞれのイベントについて公式ウェブサイト、Facebookなどのソーシャル・ネットワーキング・サイト(SNS)を事前に確認した。デジタル・エスノグラフィーの手法を用いて記録と調査視点の書き出しを行った(Hine 2000, Kelly-Holmes 2015)。異国フェス当日は言語景観調査(猿橋 2016a)、参与観察、カジュアルなヒアリング、資料収集を実施し、フィールドノーツを作成した。録音・録画は一般参加者に許されている範囲で行った。フェス終了後にもデジタル・データの収集とメモ書きを行った。

Table 1: 調査地

	フェスティバル名	開催日	場所
①	第7回日韓交流おまつり	2015年9月26日, 27日	日比谷公園
②	第3回ミャンマー祭り	2015年11月28日, 29日	増上寺
③	第2回カンボジアフェスティバル	2016年5月7日, 8日	代々木公園
④	第8回ベトナムフェスティバル	2016年6月11日, 12日	代々木公園
⑤	第3回コートジボワール日本友好 Day アフリカンフェスティバル	2016年6月25日, 26日	代々木公園
⑥	第11回ブラジルフェスティバル	2016年7月16日, 17日	代々木公園
⑦	(第1回) 台湾フェスタ	2016年7月30日, 31日	代々木公園
⑧	One Love Jamaica Festival (2004～)	2016年8月6日, 7日	日比谷公園
⑨	(第1回) アラビアンフェスティバル	2016年9月10日, 11日	代々木公園
⑩	第24回ナマステインディア	2016年9月24日, 25日	代々木公園
⑪	第14回ディワリインヨコハマ	2016年10月15日, 16日	山下公園
⑫	第2回ベトナムフェスタ in 神奈川	2016年10月29日, 30日	神奈川県庁前
⑬	第4回ミャンマー祭り	2016年11月26日, 27日	増上寺

上記の異国フェスは地理的にも文化的にも隔たった国名や地域名を冠しているのだが、イベントを実行する装置は類似している。フェス場はステージと出店ブースに大別される。ステージでは開会式や表彰式といったセレモニーの他、

異国フェスの言語政策論的分析

音楽、舞踊、トークショー等の催しが行われる。ステージプログラムは公式サイト、紙媒体のプログラム、ステージ横の立て看板に掲示される。演者や演目の詳しい情報はインターネット上に公開される。演者が自分のサイトを持っている場合にはリンクが貼られることもある。演者が運営しているサイトと、異国フェスの公式ページで紹介される紹介の文言は完全に一致していないことが多い。異国フェスで前面に出す内容が吟味される過程が垣間見える。

出店ブースはフードブースを中心として、いくつかジャンル分けされる。物販、学習・経験、NGO・NPO、観光、美容、企業紹介などである。出店者は公式ホームページ等で募られる。出店希望者は申込書を提出し、実行委員会の審査を経て出店が決定する。数回の事前説明会への出席も義務付けられている。出店者の情報は会場マップと照応させた形で公式サイトに公開される。出店者が独自のサイトを持っている場合にはリンクが貼られることもある。

この他、フェス場には本部、案内所、休憩所、喫煙所、ゴミ捨て場、トイレなどが設置される。案内所ではプログラムの配布や遺失物の管理、会場案内などが行われる。喫煙所やゴミ捨て場、トイレは異なる異国フェスでもほぼ同じように設置される。公園管理者側の要請や手配に基づくためであろう。一般来場者には制限されている空間もある。ステージ演者が準備をしたり、来賓客をもてなすための控室、ボランティアの休憩所などである。

公式サイトには、異国フェスの概要、主催者挨拶、ステージ演者や出店者の募集・紹介、広報用ちらし、タイムテーブル、マップ等、様々な情報が掲示される。協賛企業とボランティアの募集も事前準備の重要事項である。協賛企業は異国フェスの運営資金を担う代わりに広告が掲載される。企業のロゴが並べられ、各企業のサイトにリンクが貼られる。異国フェスを盛り上げる仕掛けとしてコンテストや抽選会などが企画されることもある。コンテストの告知、参加は公式サイト上で行われ、異国フェス当日には入賞作品の発表や表彰式が行われる。

開催が複数回を重ねていくにつれ、過去のフェスティバルの記録も公式サイトに掲載される。これは異国フェスが継続性を重視している証とも言えるが(猿

橋 2016b), 過去の様子を写真や動画で掲載することが, 参加者に異国フェスでの振る舞いや行動の適切さ(規範)を伝える面もあろう。公式サイトとは別に Facebook や Instagram などの SNS を稼働させている異国フェスも増えている。SNS では, より相互作用的なコミュニケーションが可能になる。複数の言語を交えたやりとりが盛り込まれるのも, 公式サイトよりも SNS に顕著である。準備段階の作業言語に限られた言語に収束していく過程も SNS に見ることができる⁵⁾。

4. 異国フェスの言語政策

このような共通の枠組みを各所に備えている異国フェスについて, 言語政策面はどのように認められるかを纏める。筆者が調査を実施した 13 回, 12 種の異国フェスで言語政策を明文化しているものはなかった。ミャンマー祭り(②), ⑬)は実行委員会の規約が日本語で定められている。しかし, 内容に言語についての規定はない。異国フェスの言語政策は慣習を築き上げている段階にあると言えよう。

公式サイトで複数言語のページを設けているのは, ①日韓交流おまつり(日・韓), ③カンボジアフェスティバル(日・英・クメール), ④ベトナムフェスティバル(日・越), ⑥ブラジルフェスティバル(日・ポルトガル), ⑩ナマステインディア(日・英)の 5 つである。⑪ディワリンヨコハマは日本語と英語が混在したサイトとなっている。

ソウルと東京の両都市で開催される日韓交流おまつりはほぼ完全な二言語併用を実現している。均衡した二言語併用の難しさは, 他の複数言語サイトが徐々に日本語へと比重を移していくところから窺える。開催概要や挨拶文など, サイト立ち上げ時には複数言語が準備されていても, 準備が進むにつれ日本語の情報量が増えていく。協賛者, 出店者, ステージ演者, ボランティアの募集は

5) コートジボワール日本友好 Day アフリカンフェスティバル(⑤)が, 一国名を冠したコートジボワール日本友好 Day(第 1 回~2 回)から, アフリカンフェスティバル(第 3 回)へと対象範囲を広げる過程で, 作業言語がフランス語から英語に移行していった様が Facebook に確認できる(猿橋 2016b)。

日本語が主となる。特に出店は衛生管理や火器の扱い、適切に輸入された物品を扱うことなどが求められる。こうした規定の説明や、書類の作成、日本の法令とも関連するやりとりを含むため、日本語が主要な作業言語に移行していく。

ボランティアは受付、案内、誘導、パトロールなど言語コミュニケーションを主にするものから、機材の運搬や設置、ゴミ処理、清掃など、多岐にわたる。ボランティア募集が日本語のみでなされる場合、そのこと自体が日本語力を期待していることを表明している。ミャンマー祭りもベトナムフェスティバルも募集は日本語のみだが、「ミャンマー語と日本語の両方が話せる方歓迎」、「ベトナム語ができる方大歓迎です」と言語間を橋渡しできる人を推奨する旨を明記している。ナマステインディアのボランティアは日本語・英語のいずれでも申し込めるが、英語の申込書にのみ日本語力の記入が必須となっている。

異国フェスにおいてその国の言語は、接客や案内のための、いわば実用的な言語としてだけでなく、その国らしさを演出する役割も担う。その国について初めて触れる人が、異国フェスを通して文化や言語に関心をもつこともある。イベントの準備段階ではその国の言語を等しく扱おうとする姿勢がありながら、イベント開催場が日本であるが故に、日本語へ移行していく傾向が生じやすいのであれば、どのような工夫で日本語以外の言語をイベントの中心に取り戻すことができるのだろうか。引き続き探求すべき課題である。

5. ステージトークのディスコース分析

異国フェス場におけるマイクロレベルの言語管理は、各ブースの看板掲示や接客、ボランティアによる誘導など各所で多彩に繰り広げられている。その中で、本稿ではステージトークに注目する。ステージでは開会や閉会が宣言されたり、大会実行委員会からの連絡が伝えられたりもする。このことによって、ステージはフェス場の中心的な位置付けを帯びる。また、物品を媒介とせず言語コミュニケーションが中心となる場であること、ステージでの語りにおいて主客関係が転換したり交渉されたりする局面が観察されたことから、ステージトークを事例抽出の場とすることとした。13事例のうち、本論では台湾フェスタからの

事例を採用した。それは、台湾フェスタが第1回の開催であり、演者には等しく過去の経験がないこと。またステージトークでは予め用意した原稿を読み上げるといった形態も少なくないのだが、本稿で紹介する演者は自然な態度でステージトークを展開していた。そのことも事例選定の決め手となった。

5.1 事例の概要

台湾フェスタは2011年に「中華民国建国100年」に合わせて初開催されるはずだった(朱2016)。しかし東日本大震災を受け開催は中止とされた。こうした経緯を経て、2016年の第1回台湾フェスタは念願の開催となった。大会実行委員長の朱恭亮氏は、台湾フェスタの開催主旨を「在日華僑の方、台湾の方は勿論、日台交流を応援して下さる日本人を始めとする多くの人達と協力」して開催することで「日本と台湾の更なる交流の橋渡し」とすると述べている。

台湾フェスタ2016では36のステージ演目が用意された。総合司会は中国語を母語とする日本語のバイリンガル話者で、演目の紹介は日本語・中国語の二言語で行われた⁶⁾。時間調整や実行員会の連絡など、その場で必要に応じて行われる発言は日本語が主であった。

ステージで演目が始まると、どの言語で進行するかは演者に任せられる。日本語(あるいは中国語)しか話せない場合には選択の余地がないわけだが、演目の前後の挨拶だけは中国語(あるいは日本語)とするなどの配慮が見られた。台湾から招かれた演者も、挨拶や単語レベルで日本語を挟むなどの工夫をする。会場の反応を見ながら徐々に英語に移行していった演者もいた。彼の公式Facebookは中国語で、台湾フェスタに参加する旨も中国語で告知されていたが、演技終了後の報告の投稿は英語に切り替わっていた。当日参加した人から英語で書き込みもなされており、英語という媒介言語がステージ上で模索され、その選択によって聴衆とのつながりが生まれたことが確認できる。

いずれのステージパフォーマンスも言語面の管理・調整が様々に行われてお

6) 開会式のみ例外的に中国語・日本語の順で二言語併用であった。

り興味深いですが、ここでは台湾フェスタの紹介文において多言語話者であることが明記されていた Eri Liao 氏のステージトークを事例に分析する。台湾出身の歌手と日本人ギタリストによるパフォーマンスである。公式サイトに掲載された歌手のプロフィールは以下の通りである。

Eri Liao (エリ・リャオ)

台湾・台北生まれ。(中略)

NY 留学中にジャズを学び、台湾、日本、アメリカ、ブラジルなど、古今東西の音楽を多言語で歌う。ジャズをバックグラウンドに、かつ台湾原住民族・タイヤル族という自身のルーツを活かし、台湾原住民の音楽からテレサ・テン、ジャズ・スタンダード、ビバップまで、独自にアプローチする演奏がライブで好評。現在東京をベースに活動、2016 年アルバムリリース予定。

(台湾フェスタ実行委員会 2016)

台湾原住民のタイヤル族のルーツをもち、東京とニューヨークの大学で学んだ経歴をもつ。ステージでは台湾原住民の楽曲が 2 曲、中国語(北京語)で 2 曲の計 4 曲が披露された。以下は曲間のトークを文字化したものである。広くディスコースの結びつきも含め、どのように複数の言語が管理・調整されているかを見ていきたい。

【抜粋 1】

今日は台湾フェスタということで もう美味しそうなお店がいっぱい並んで 私もすっかり台湾の気分になってきているんですが ええと今日は台湾の曲を沢山歌ってみたいと思います 二曲目は ええとですね ご存知の方が多いと思います 台湾のシンガーと言えば デン・リーチュン(鄧麗君) テレサ・テンの曲を歌ってみたいと思います 今日中国語の曲でおそらくご存知の方が多いんじゃないかなと思います 路邊的野花不要採

【抜粋 2】

では どんどんどん歌っていきたいんですが 次の曲は 一曲目は台湾の先住民族の曲 二曲目は台湾を代表するシンガー テレサ・テンの曲ときて ええと次は実はこれはとても古い 18 19 世紀 1800 年代後半のアメリカの曲です ええと皆さんもご存知の作曲家だと思えますが ステイブン・フォスターという作曲家がいて 「おおスザンヌ」とか「ケンタッキーの我が家」とかを書いた人ですが その人が書いた曲で 日本語の題名では「金髪のジェニー」という題名で知られている曲があります その曲を今日は ええとですね 向こうでもあるのかな 日本でもフォスターの曲は音楽の教科書とかにも日本語の歌詞付きであって みんな歌ったことがある方も多いと思うんですが そのフォスターの曲を中国語の歌詞で 歌ってみたいと思います ええと 原題はですね Jeannie With the Light Brown Hair で ええと 茶髪のジェニーなんですけど 日本語の題名は金髪のジェニー で中国語で歌う題名は ゾンファージェニー っってって ゾンファージェニーは棕櫚 棕櫚色の髪のジェニーという曲です

【抜粋 3】

((ギタリストに向って)) 実演 してみましょうか いける? じゃあ ((観客に向き直って)) 今日 あの こう見えて 一応 (ギタリストに台湾原住民族の) 衣装を着てきたんですけど 日本人です あの日本人の方も どうぞご心配することなく あの一緒に混ざって歌ってください では ええとですね アミ族の曲は コールアンドレスポンスの形で こうリーダーが 今日私がリーダーの役をやるので リーダーが歌いかけて それで皆さんが応えてくれるというそんな形式で歌う曲が多いです この曲もそうなので じゃあちょっと リーダーと みなさん役を今日ファルコンがやってくれますので、どんな感じになるのか ちょっと見ていてください

実演

【抜粋 4】

こんな感じです いけそうですかね ええと ちょっと分解してみると
ホーハイアン イア ホーハイアン と言っています 長そうですが え
えと分解すると ホーハイアン イア ホーハイアン なので ホーハイ
アンを2回言ってイアではさんでください 大丈夫ですね ホーハイアン
イア ホーハイアン 7文字ぐらい 覚えてください

ではこんな感じで もうできちゃうかしら 練習したいですか 練習し
ちゃう？ 本番行きますかね じゃあ皆さんぶっつけ本番で 皆さんに
歌ってもらわないと私だんだん声を小さくしていくので どうぞ大きい声
で歌ってください ええと題名をじゃあ紹介しますね この曲は ええと
あっ ちなみに 何歌わされているか分からないという方がいるとかわい
そうなので 一応説明しますと 意味は ありません えっと なんだろ
う ちょっと日本語の民謡とかで「ハーヨイヨイ」とかあんな感じで 特
に意味がない言葉をこう掛け声みたいに言っていくので 心配せずに 変
なことを言わされていると思わず どうぞ 大きな声で 今日 気持ちよ
く歌って 最後の曲を皆さんと一緒にできたらいいなと思います 中国
語での題名は シュータオク (石頭歌, 石ころの歌) それでは いきま
しょう

ディスコースとは広義には言語の具体的場面の使われようから生成される意味 (Gee 1999) と定義づけられるが、その意味をどこに見出し得るかは数々の研究者が分析法を提唱してきた。ここでは、Scollon & Scollon (2004) のネクサス分析を参照する。Scollon & Scollon (2004) はディスコースを生み出す3つの要素に注目した。場のディスコース、相互作用秩序、歴史的な身体である。

場のディスコースとは、ここでは台湾フェスタという観念的な場であったり、

より具体的にはステージという場が設定されていることによって生み出され、理解されるディスコースである。相互作用秩序とは、コミュニケーションに介在する人々がどのような関係性を作り上げようとしているかに関連する。そしてそれはコミュニケーション参加者がこれまで経験してきた個々の歴史（歴史的な身体）にも関係している。これら3つが結びついたところに具体的な社会行動が現れると見る。この枠組みを拠り所としながら、まずは継起順序に沿って見ていき、続いて言語管理に焦点を絞った分析へと深めていくこととする。

5.2 ステージトークのディスコース・ネクサス分析

抜粋1の冒頭では、ステージを他のエリアと結び付けている。場のディスコースが前景化される。舞台は観客席よりも一段高い位置にあり、他のエリアを見渡すことが出来る。演者の視点からはフードエリアに立ち並ぶ看板や調理過程で出る湯気なども見える。前もって出演が決まっている演者にとって、台湾フェスタという場は自明なはずだが、あえてその場が台湾フェスタであることに言及する。その場の作用によって演者自身も「台湾の気分になってきている」と演者自身の状態の変化に言及している。空間は一時的に台湾（風）にすることが可能で、それに触発された演者自身も協力・参加をするという流れを作り出している。

ステージ上の演者は聴衆の属性について知ることができない。東京をベースにライブ活動を行っているとのことだが、通常のライブとフェス場の客層は異なると想定されよう。台湾フェスタは今回が初回のため、過去の経験は誰も持ち合わせていない。それでも抜粋1の3行目、および4～5行目にかけて「ご存知の方が多だろう」と推論を表明する。聴衆がどのような文化的背景や嗜好を持つ人かは分からないながら、台湾通であるはずという前提に立っている。「今日は台湾フェスタということで」台湾料理の店も沢山並んでいるし、観客も台湾通が集まっていると位置付けることで、台湾フェスタという場のディスコースはさらに前景化される。

台湾の代表的な歌手、テレサ・テンの名は日本人でも多くの人が知っている

だろう。彼女の名前をまず台湾での呼び方で紹介している。中国名と日本での呼称を両方使い、デン・リーチュンが生前中国語で歌っていた曲を選択している。この一連の言語選択は台湾らしさの演出に直結していると言えよう。

抜粋2では3曲目の演目を紹介する際に、改めて今までの演目を振り返っている。台湾原住民の曲、日本でも広く知られる台湾人歌手の歌に続いてアメリカの古く、世界的に知られている曲を選曲したと言う。選曲にはローカルからグローバルへといった演者自身の辿って来た足跡に照応する流れが認められる⁷⁾。歴史的身体のディスコースには演者が生きてきた数十年にわたる経験から生み出されるものと、この異国フェス場の過去数分間の振り返りの両者が重なる。経過時間において大きく異なるものが重複して動員されている。

抜粋2に見られる聴衆との相互作用秩序には、抜粋1との相違が認められる。抜粋2の3行目では、抜粋1と同様に「皆さんもご存知だと思います」との推論の発話がある。その根拠は抜粋1に見た「台湾通の聴衆」とは異なる。7～8行目にかけ、日本の学校における音楽教育の中で、当該の曲が紹介されていることに言及している。フォスターの曲が紹介される学校段階を、演者が日本で実体験として持っているのか、あるいは日本で音楽活動を展開する中で、そのことを知るに至ったのかはこのテキストからは特定できない。しかしディスコース実践として、「向こう」である台湾については「あるのかな」と疑問とし、日本では学校音楽教育に盛り込まれていることから「歌ったことがある人も多いと思う」との推論を提示している。つまり、ここでは幼い頃から日本で暮らしてきた人々を聴衆と想定していることが分かる。異国フェスの場は一時的、疑似的に台湾を持ち込む場であり、抜粋1ではそれを前景化させていた。しかし、フェス場は紛れもなく東京の代々木公園である。一時的な場のディスコースが、恒常的な場のディスコースによって後景化された瞬間と読むこともできよう。

アメリカで生み出された曲を、オリジナルの英語でも、聴衆にとって身近な

7) 「今、ここ」に表出するディスコースが、発話者が経験した過去のディスコースとの連結・投影に注目して意味解釈を行う Wortham & Reyes (2015) 版のディスコース分析にも通じるところである。

日本語でもなく、中国語で歌うことが選択されている。原題をそのまま訳せば「茶髪のジェニー」になるところが、日本語では「金髪のジェニー」と訳されることに言及している。ここで聴衆からは笑いが起こる。この相互作用が成り立つためには、日本語の「茶髪」と「金髪」が持つニュアンスの違いを両者が了解しているという前提が必要になる。聴衆から湧き上がる笑いに接して、演者は聴衆が台湾よりも日本の言語文化に精通している人々であることを確認することになる。ステージ上の演者は一方的に話しているかのように見えるが、聴衆との相互作用がここに認められる。中国語のゾンファーは聴衆にとっては新しい知識であろうという前提に立った発話が生み出されるのである。

抜粋3から抜粋4にかけてのステージトークは、抜粋1、2と比して動的になっている。演者は、聴衆に共に歌うよう促す。つまり聞く人から歌う人に役割を転換させようという試みである。相互作用秩序の書き換えであり、そのため発話量は抜粋1、2と比べて多くなっていることが確認できる。

抜粋1から4を通じて、大きな目的である「台湾を演出」することに変わりはない。これまでの演者と観客の関係において、台湾らしさを見聞きする観客の姿勢は受け身である。演者からの呼びかけによるものの、歌う側となることは、具体的に台湾を経験することにつながる。同時に、会場全体に歌声が届けば、フェス場の「台湾らしさ」に寄与することにもつながる。台湾らしさの演出が段階的に広げられていると見ることができよう。聞き手という受け身の立場であった観衆は、台湾原住民の言語のフレーズで歌うことによって「台湾らしさ」を演出する側としての役割を担うことになる。

そのために演者が行う働きかけも多角的になっている。抜粋3はそのためのデモンストレーションである。「コールアンドレスポンス」という歌唱形態について、さらに言語化して説明している。歌いかける人（リーダー）と、それに応える二つの役割があること、演者が「リーダー役」を担うことは「今日」に限定して提案されている。

さらに抜粋4では、フレーズを分解して説明し、記憶にとどめてもらうための工夫をしている。続いて、大きな声で歌うことを促すために、会場の声の小

さい場合には「私(も)だんだん声を小さくする」と共通の合図を提示している。題名を紹介しようとして、意味を先に伝えるべきだと気づき、説明を始めるが「意味は ありません」と言う。日本の民謡を参照することでフレーズの理解を促している。抜粋4の言語管理の営みは次項で引き続き分析する。

5.3 聴衆の想定と言語管理

上記のディスコース分析に基づき、ステージトークの言語管理に焦点を絞って考察を続ける。歌が台湾原住民の言語と中国語で歌われたのに対し、ステージトークは全体を通して日本語であった。演者は聴者に語りかける言語として日本語を選択している。演者は聴衆をどのように想定しているのだろうか。

台湾フェスタのステージに集う聴衆は、抜粋1では台湾通として、抜粋2では日本で学齢期を過ごしてきた人々と認識されている。抜粋3では共演者のギタリストが日本人であることから「日本人の方も……一緒に混ざって歌ってください」と促している。ここから、日本人は聴衆の全体ではなく、一部であるとの認識が窺える。抜粋2では茶髪と金髪のニュアンスの違いが、抜粋4では日本民謡に代表的な掛け合いのフレーズが了解事項として示される。ここから日本の言語文化に馴染んでいる聴衆が想定されていることが窺える。

日本人は聴衆の一部であるならば、他の構成員はどのような人々だろうか。デン・リーチュンが歌う中国語の歌に馴染みを持ち、日本人と等しく日本語の言語文化に馴染んでいる人々である。そこには台湾をルーツに持ちながら日本で暮らす人々が想定されていると考えられる。

台湾通であったり、台湾のルーツを持つ聴衆は、台湾を代表する歌手である故テレサ・テンの中国語の楽曲に通じており、英語から多言語に歌詞が翻訳されているフォスターのことも知っているであろうと想定されている。かたや、台湾原住民の音楽やフレーズについては知らないだろうと想定されている。台湾原住民の言語文化を尊重する台湾での動きは、1990年代以降の教育改革において台湾ナショナリズムを高揚させることと結びついて進められてきた(菅野2012)。菅野(2012)は「郷土言語教育」によって推進される「本土化」と外国

語（英語）教育によって推進される「国際化」が台湾の現代教育の「基軸」となってきたと指摘する（p.241）。台湾にルーツを持っていたとしても、台湾への造詣が深くとも、日本にいる以上、台湾の言語教育政策の転換に直接触れる機会は限られていよう。同時に、拡張傾向にある英語教育は「郷土言語教育」にとって脅威とみなされる局面もあるという。台湾独自のアイデンティティを滋養・表現することを担ってきた原住民言語・文化であるが、国際化のうねりの前では劣位に据え置かれる。この言語間の地位関係を、原住民言語の楽曲をめぐるディスコースは投影させていると見ることができよう。すなわち、台湾を代表するテレサ・テン、アメリカを代表する作曲家スティーブ・フォスターの曲を中国語（北京語）で歌うことは聴衆にも馴染み深いこととして、台湾原住民の曲やフレーズについては多くの説明を要する聴衆が想定されているのである。端的に言うならば、聴衆にとって馴染みのある言語は「日本語>中国語>英語>原住民言語」と想定されていることが窺える。

ここでのステージパフォーマンスは、限られた時間の中でより多くの時間を原住民の音楽の披露と説明にあてるということにより、現状の言語地位の不均衡を是正する試みと読み解くこともできる。多角的に説明し、聴衆と共に「気持ちよく」歌い、舞台を締めくくるということは、参加者に台湾原住民の言語文化を経験した機会として、より強く印象付けられることであろう。

さらに、ステージトークにおける原住民言語の扱われ方から、未知の言語に接することをめぐるディスコースも読み取ることができる。抜粋3で演者は日本人ギタリストに台湾原住民の衣装を「着せてきた」と表現する。ステージトーク全体を通してポライトネス・ストラテジーを丁寧に展開する演者が、ここでは直接的な使役表現を用いている。そこには、演者間の信頼関係も窺える。同時に、台湾の原住民文化を演出する上では、そのルーツを持つ側に采配の権限があることを示している。

演者達は台湾原住民の民族衣装を着ているが、ギタリストは日本人なので「日本人の方も……心配することなく……歌ってください」と言う。そこには、民族衣装を着ることが民族内外の境界線を示す可能性が含意されている。民族衣

装を着ていない人は、その民族について知らないだけではない。それを目にするだけで自分は「部外者」であると感じ取る可能性がある。一緒に歌うべきではないと判断するかもしれない。すなわち、演者は服装という非言語メッセージによって、聴衆が察するかもしれない規範からの逸脱への懸念に言及し「心配せず、歌ってください」と促す。これは、演者自身が言語圏を越境した経験（歴史的身体）があるからこそその言語管理実践であると言える。

抜粋4の後半にも同様の言語管理が認められる。これから歌うアミ族の楽曲の曲名を紹介しようとして、フレーズの意味を伝えていないことに気付き、曲名紹介を後回しにする。そこで「何を歌わされているか分からない」という状況は「かわいそう」なことと言及している。意味の定かでない他民族の歌を歌うとはいえ、日本語が主流の日本という場である以上、さほど不安や悔みさを感じることはないかもしれない。それでも「特に意味がない」フレーズについて、丁寧に意味がないことを説明している。これも、言語圏を越境し意味の分からない言葉への不安感を経験あるいは、そのような経験を持つ人々に多く触れてきた演者だからこそできる言語的配慮と考えられるのではないだろうか。これも、聴衆が抱くかもしれない規範からの逸脱への懸念を先取りして配慮した言語管理と言えるだろう。

6. 結論と今後の展望

台湾フェスタは今年初めての開催である。初開催でありながら、その空間が秩序立ったものになるのは、既存の数々のディスコースが支えているからに他ならない。毎週末のように行われる各種のイベント、フェスティバルが台湾フェスタにも秩序をもたらす。代々木公園の野外ステージは長年、パフォーマンスが持つディスコースを繰り返し産出して来た。ステージに立つ演者は、それがふさわしいとみなされる経験（歴史的身体）を持ち合わせている。演者は異国フェスに招かれたゲストでもあるが、同時にパフォーマンス中は多くの権限が与えられている。マイクを用いて全体に呼びかけることはそのひとつである。高い位置から、他の演出者である台湾料理ブースの活気を見渡すことが出

来るからこそ、それをディスコース資源として活用しながら自らの管轄であるステージを台湾らしく演出していくこともできる。

一方で聴衆が有する個人空間は狭く、そこでは日常では不自然なほど隣の人と近接した位置に座る。代々木公園の観客席はベンチ型でイベントに応じて着脱可能だが、台湾フェスタでは設置されていた。異国フェスで、観客席に座る人々は舞台を見ることを目的に座っているとは限らない。休憩をする人、待ち合わせをする人、食事をする人、次の演目までの席取りをする人と様々である。それでも全員が舞台を向いて座り、演奏の終了時には拍手をし、会話は声を落としてするなど、観客席に座るほとんどの人々が聴衆としてふさわしい振る舞いをしている。ライブ会場やコンサート会場ほどではないだろうが、演者と聴衆の間の相互作用を相互協力的に生み出している。

場のディスコースは演者の権限と、聴衆の振る舞いを固定化することに役立っているようにも見えるが、相互作用秩序が場面に個性を与える。ステージにおいて演者は、予め計画した通りに進めることも可能だが、聴衆の様子や反応を見ながら、新たな関係を作り出すこともできる。特に言語背景の異なる人々が一堂に集まることが予測され、実現する異国フェスの場合は、この点において独特のディスコースを生み出し得ることが、ステージトークのディスコース分析から明らかとなった。それは聴衆との相互作用秩序によって微修正されたり、台湾のよりマクロな歴史・政治・文化的ディスコースを投影するものも含まれる。同時に、台湾に限らず言語圏を越境した人々に共通するディスコース、すなわち多言語公共空間のディスコース実践の産出が垣間見られた。それは言語圏を越境した経験、すなわち越境者の歴史的な身体から生み出されるものと見ることができよう。

異国フェスが個々の言語に、それがその国の国語であれ、原住民(先住民)言語であれ、触れる機会となることが第一義的には望ましい。同時に、そこでの取り組みが個別の言語については限られた接触機会となったとしても、様々な言語文化背景を持つ人々が共に場を作り上げていく上で、どのような配慮が必要であるかを考え、実践する機会を異国フェスは提供する。

異国フェスの言語政策・言語管理には、事前に準備、計画されているものと、必要に応じた対処の両方が確認される。様々な言語的・文化的背景を持つ人が一堂に介した際に生じる言語問題、それへの気づき、対応がまさに行われている場であると考えられる。言語管理理論の枠組みに当てはめれば、言語問題は予見されることもあれば、起きていても見落とされることもある。気付かれても対策が講じられない場合もあれば、対策が講じられたとしてもそれが言語問題の解決に直結しないこともあろう。個々の言語問題への対処は、実行委員会や個々のブース出店者、ステージ出演者の経験として蓄積されている。実践は確実に蓄積されているが、それを記述するまでには至っていない。異国フェスの言語政策・言語管理は、多様な言語背景を持つ人々で構成される公共空間における、より効果的な言語政策を考える上で示唆を与えようと言えよう。本論は台湾フェスタのステージトークを事例としたが、実際の異国フェスはインターネット場も含め多様で重層的な言語管理が展開されている。引き続き、エスノグラフィックな調査と、より広範かつ子細なつながりや変容の分析に継続して取り組んでいく意義がある。

【謝辞】 本稿の執筆にあたり、Eri Liao さんからデータ掲載の許可、草稿へのコメント、研究への励ましをいただきました。心から感謝申し上げます。

引用文献

- Blommaert, J. (2007). Sociolinguistic scales. *Intercultural Pragmatics*, 4 (1): 1-19.
- カンボジアフェスティバル実行委員会 (2015). カンボジアフェスティバル 2015 報告書 <http://cambodiafestival.com/pdf/20150529-no-account-statement.pdf>
- Ge (1999). *An Introduction to Discourse Analysis: Theory and Method*. Oxon: Routledge.
- Hine, C. (2000). *Virtual Ethnography*. London: Sage.
- Hornberger, N. (1996). *Indigenous Literacies in the Americas: Language Planning from the Bottom up*. Berlin: Mouton.
- Hornberger, N. (2013). Negotiating methodological rich points in the ethnography of language policy. *International Journal of the Sociology of Language*, 219: 101-122.
- Hornberger, N. (2015). Selecting appropriate research methods in LPP research: Methodological rich points. In Hult, Francis M. & Johnson, David Cassels (eds.) *Research*

- Methods in Language Policy and Planning: A Practical Guide*, West Sussex: Wiley-Blackwell. pp.9–20.
- Hult, F. M. (2010). Analysis of language policy discourses across the scales of space and time. *International Journal of Sociology of Language* 202: 7–24.
- Hult, F. M. (2015). Making policy connections across scales using nexus analysis. In Hult, Francis M. & Johnson, David Cassels (eds.) *Research Methods in Language Policy and Planning: A Practical Guide*, West Sussex: Wiley-Blackwell. pp. 217–231.
- Hult, F. M. & Johnson, D. C. (2015). Introduction: the practice of language policy research. In Hult, Francis M. & Johnson, David Cassels (eds.) *Research Methods in Language Policy and Planning: A Practical Guide*, West Sussex: Wiley-Blackwell. pp.1–5.
- 飯田剛史 (2002) 在日コリアンの宗教と祭り——民族と宗教の社会学 京都: 世界思想社
- 伊佐リスレン (2016). カンボジアフェスティバル 2016 http://cambodiafestival.com/pdf/cambodia_festival_2016_syusaisyushi.pdf
- Johnson, D. C. (2009). Ethnography of language policy. *Language Policy*. 8 (2): 139–159.
- Johnson, D. C. (2015). Intertextuality and language policy. In Hult, Francis M. & Johnson, David Cassels (eds.) *Research Methods in Language Policy and Planning: A Practical Guide*, West Sussex: Wiley-Blackwell. pp. 166–180.
- Kelly-Holmes, H. (2015). Analyzing language policies in new media. In Hult, Francis M. & Johnson, David Cassels (eds.) *Research Methods in Language Policy and Planning: A Practical Guide*, West Sussex: Wiley-Blackwell. pp. 130–139.
- 木村護郎クリストフ (2015). 「言語管理理論における研究者の位置づけ——ヨーロッパ統合に関する調査事例から」村岡英裕 (編), 『接触場面における相互行為の蓄積と評価——接触場面の言語管理研究 vol. 12, 千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書』第 292 集 pp. 87–96.
- 高民定 (2016). 「接触場面における言語問題と問題分析」村岡英裕, サウクエン・ファン, 高民定 (編) 『接触場面の言語学——母語話者・非母語話者から多言語話者へ』東京: ココ出版 pp. 19–36.
- McDermott, P. (2012). Cohesion, sharing and integration? Migrant language and cultural spaces in Northern Ireland’s urban environment. *Current Issues in Language Planning* 13 (3): 187–205
- Mitra, S. (2016). Merchandizing the sacred: Commodifying Hindu religion, gods/goddesses, and festivals in the United States. *Journal of Media and Religion*. 15 (2): 113–121.
- 村岡英裕 (2016). 「接触場面研究のパラダイム」村岡英裕, サウクエン・ファン, 高民定 (編) 『接触場面の言語学——母語話者・非母語話者から多言語話者へ』東京: ココ出版 pp. 3–18.
- Nekvapil, J. (2012). From language planning to language management: J. V. Neustupny’s Heritage. *Media and Communication Studies*, 63: 5–21.
- Ricento, Thomas K. (ed.). (2006). *An introduction to language policy: theory and method*. New York: Blackwell.

異国フェスの言語政策論的分析

- 猿橋順子 (2016a). 「言語景観のエスノグラフィー——明治神宮の日英語揭示物比較を事例として」『社会言語科学』19 (1): 174-189.
- 猿橋順子 (2016b). 「移民コミュニティの祭りと「異国フェス」——聖なる対象としての民族・国家」『青山国際政経論集』97: 59-78.
- Schiffman, H. F. (1996). *Linguistic culture and language policy*. London: Routledge.
- Scollon, R. & Scollon, S. W. (2004). *Nexus analysis: Discourse and the emerging Internet*. London: Routledge.
- 朱恭亮 (2016). About <http://twfes.com/about/>
- Silverstein, M. (2015). How language communities intersect: Is “superdiversity” an incremental or transformative condition? *Language and Communication*, 44: 7-18.
- Spolsky, B. (2009). *Language Management*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 菅野敦志 (2012). 『台湾の言語と文字——「国語」・「方言」・「文字改革」』東京: 勁草書房
- 台湾フェスタ実行委員会 (2016). Performer <http://twfes.com/performer/>
- 谷富夫 (2015). 民族関係の都市社会学——大阪猪飼野のフィールドワーク 京都: ミネルヴァ書房
- Wortham, S. & Reyes, A. (2015). *Discourse analysis: Beyond the speech event*. Oxon: Routledge